

■学校経営のポイント

実体験のある学習活動の再評価

小島 宏

デジタル化が進行し、デジタル教科書とWeb検索による学習活動が一定の成果を上げている。その一方で、紙ベース教科書の読解と教師の巧みな説明による授業も行われている。

そして、子供の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、議論を沸騰させている。

デジタル化の光と影

デジタル教科書・教材の活用、タブレット等の活用による学習やコミュニケーション、オンライン授業など、デジタル化は授業改善に多くの光、つまり効果をもたらしている。

反面、1人1台のタブレットは、授業中の勝手な使用、ネットいじめ、掲示板への誹謗・中傷の書き込み、なりすまし、ゲーム依存、有害サイト閲覧、個人情報への拡散、犯罪被害などを誘発する影の部分もある。

これらに加え、主体的な学び(自分で考え自分でする)や対話的な学び(情報交換し学び合う)、深い学び(深い理解、考えの形成、問題の発見と解決、創造に向かう)の実現が疎かにならないかと危惧されてもいる。

実体験を通じた学習活動の様相

実体験とは、他人から聞いたことやWeb検索などではなく自分自身で直接に体験することである。

実体験を通じた学習活動は、自分で「読む・書く、見る・観察する、見学する、調査する、試す・実験する、作る、触れる・動かす・操作する、演ずる、演奏・合唱、職業体験・起業体験、裁判や議会の疑似体験」など多様にある。

実体験のある学習の必要性

実体験の必要性は、学校教育法に“教育指導を行うに当たり、体験的な学習活動、社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努める”

(31条要約)と示している。「ヒト、モノ、実社会」と実際に触れあう直接体験を強調したものである。

そして、「現実の生活や世界のことへの興味・関心・意欲の喚起、問題発見解決能力の育成、理解や思考の基盤づくり、教科等の知識・技能の総合化と活用力、成就感と自己肯定感の獲得、社会性や共に生きる力の育成、豊かな人間性や価値観の形成、体力や心身の健康づくり」への効果が期待できる。

「聞いたことは忘れ、見たことは覚え、したことは分かる」という言葉があり、概ね体験的に受容されている。また、いわゆるラーニング・ピラミッドと呼ばれるものだが、学習による知識の定着率が、講義(聞く)5%、読む10%、視聴覚20%、グループでの討議は50%、体験したことは75%、他人に教えると90%という興味深い報告もある。数値の真偽に議論の余地はあるようだが、これまでの経験から実感できるというのも確かである。

実体験のある学習の導入

デジタル化と実体験を二項対立にならぬよう配慮しつつ、「問題発見解決学習や体験活動など各教科等の授業に取り入れる、実体験を通して解決した過程と結果と理由を表現する、表現したことを基にして話し合い学び合う、学習したことを生活や新たな学習に活用する」などの実体験のある学習の展開を積極的に進めたい。

校長のリーダーシップ

各教科等の目標や指導内容の特性に応じて、年間指導計画に実体験を位置付け、学校として一貫した方針で具体的に進めるようにする。

人事評価に伴う管理職の授業観察による指導・助言の際にも、実体験を効果的に取り入れているかどうかという視点を取り入れるようにしたい。

(こじま・ひろし=元東京都公立小学校長・(公財)豊島修練会顧問)

●複雑な教師の専門性を、七つの「指標」で明解に整理 《好評発売中！》
あなたの授業力はどのくらい？ できる教師の七つの指標

ジェフ・C・マーシャル【訳】 池田匡史・雲財寛・吉田新一郎【編集】 四六判 / 280頁 / 定価 2,640円



■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。